今月の読み物

巨樹・巨木

細田木材工業株式会社
顧 問　　細 田 安 治

今月号から「全国巨樹・巨木林の会」が日本全国の巨樹・巨木を調査し貴重な日本の資産としてデータ化し纏めている。その数６万764本に及んでいる。このなかから代表的なものを選び、「木材や」として「木材や」の皆様にお届けしたい。と大それたことを思い付いた。このきっかけは筆者の家内と縁続きのH氏に 勧められ10年ほど前に入会した。この会には故人となられた理事井関和郎さん㈱もくもくの社長、当会の副会長長澤良一さん（塗装研究会でご指導頂いている）、鶴見の外山（トヤマ）家具の外山社長さんなど、仕事を離れて大変お世話になっていた。

事情により一旦退会したが、本年から正式な会員となった。もう一つは筆者の会社で長年役員を務め貢献を頂いた内林正司さんは、巨樹、巨木に造詣が深く、日本全国の巨木を訪ね写真帳とデータを作成し、現在も更にデータを蓄積中の巨樹巨木の権威者である。このような事情から再度入会し巨樹巨木の探求をと決意した次第でございます。尚、本稿はシリーズ連載を予定しています。途中に間違いがございましたらご指摘、ご叱声を賜りますようお願いを申し上げます。

◇全国巨樹・巨木林の会

この会の歴史を紐解くと1993年（平成５）から2013年（平成25）に設立20周年を迎え盛大に記念式典を開催し立派な記念誌を発行した。そのほか年２冊程度の会報誌を発行し情報の発信に努めている。2013年（平成25年）現在、会員数は約350名、団体は20団体に迫る勢いだ。

◇歴史

20周年記念誌によれば、この会の歴史は日本植物学の第一人者と言われる本多静六博士が1916年（大正５）に報告した巨樹・名木の現況、生存、枯死、消失原因を対象として、巨樹・名木の保護・保全のために更に調査したものである。報告から85年経過した1998年（平成10）の時点で、生存率が39％、枯死･消失は52％、不明は９％であった。生存率の高い樹種は、カヤ、イチョウ、クス等で、枯死・主室率の高い樹種はマツ、シイであった。枯死・消失木の77％には、何らかの保護制度があった。

広葉樹　白岩岳のブナ
（秋田県仙北市）

• 樹木学の第一人者本多静六博士

本多静六博士が大正初期に報告した1500件の巨樹･名木の現況と消失原因

巨樹、名木の保護保全には、所有者などの手厚い取り扱い文化財保護等も法制度による保護、樹木医、巨木フォーラム等の事業、また技術的には土壌改良、避雷針の設置、発根促進用の土盛りが必要である。

はじめに巨樹は、生物界において、最大、最大重量、最長寿の存在であり、文化、歴史的遺産、地域のシンボルとして生活や自然を豊かにしていく上で、かけがえのない価値を有するとともに、年輪等に過去の環境の状況を記録していくことから、古気象学の研究素材としても、学術的にも貴重なものである。

また、林業ではケヤキなどの巨樹は銘木として生産されてきた。更に古くから信仰の対象となり、巨大桜等は観光資源としても重要である。また地球環境に重大な影響を与える炭酸ガスを長期間吸収し、炭素を固定し、自然環境面からも重要な資源である。

しかし、巨樹は台風、雷、風雨、腐朽等の自然因子や、道路、建築整備等の社会的因子で急速に減少し、保全が必要と言われている。そこで現在の巨樹が50年、100年後にどのような状況になるか把握することは重要なことであるが、一研究者では、このような長期間の研究は不可能である。

幸いなことに1913年（大正６）に、本多静六博士は、「大日本老樹名木誌」で、当時の日本領（台湾・朝鮮を含む）の78樹種、1500件の巨樹・名木の名称、所在地、地上５尺の周囲、樹高、伝説等を報告している。そこで、これらの樹木が、現在どのようになっているかを調査し、現在の巨樹・巨木の保全と取り扱い方法の一助とする。

・結論

今回の調査で39パーセントの巨樹・名木が生存している事がわかった。85年間の台風、落雷、水害等の自然災害、大戦、建築、道路工事、周囲危険による伐採等の社会的因子を考えれば良く残ったと思われる。巨樹・名木の保護には所有者、管理者、地域の方々の手厚い取り扱い、文化財保護法、市町村による市民の木保全樹木（木）への指定、樹木医等の制度、巨樹・巨木林等保全管理推進事業、巨木フォーラムのような事業の拡大が望まれる。また土壌改良、根継ぎ、避雷針、主幹折れ防止用の鉄製バンドの設置、発根のための土盛りも巨樹を保全するには必要な技術である。なお、スギ、ヒノキ、マツのように「ひこばえ」の生えにくい木に関しては、早くから２代目の植栽が望まれる。

樋口国雄（農林水産省森林総合研究所）「巨樹・巨木林」会誌より抜粋

◇巨樹・巨木林の会とは

・そもそも巨樹・巨木林の会とはどのような崇高な会なのだろうか。と敬意を抱きつつ20周年記念史を開いた。

設立趣意書によれば、「木材や」としていかに不勉強であったか、凄く素晴らしく、しかも威厳があり写真からの圧力というか神聖で厳粛そのものである。自分は神社の拝殿に向きあい、心静かに祈祷しているそんな自分だ。いま神社の前にいるのか。しからば、「うがい、手水に身を清め無ければならない」と言う厳粛な霊気に打たれる。歴史を刻んだ素晴らしい巨樹・巨木の写真が紙面からまるで押し寄せてくるような感覚を覚えた。ともあれ、素晴らしい写真に圧倒されたのが実感です。その上で改めて神聖な気持ちで記念誌を拝見した。

・巨木を語ろう全国フォーラムから発展

1988年（昭和63）昭和から平成に入るころ、巨樹・巨木を全国的に調査する事業がはじまり、

その調査結果を持ち寄って同好の士と共に情報交換のような目的で始まったのが、発表と意見交換の場「フォーラム」の始まりである。と理解している。このフォーラムは好評で５回連続で実行され成果が

上がった。次にこのままではもったいない。もっと成果を上げる方法はないかと模索し、５年後の1993年（平成５）にできたのが第一回「全国巨樹・巨木の会」である。当初会員は200人弱、会費の収入も100万円ほどであったがその後、助成金や委託事業など収入があり、平均300万円ほどで運営している。木を愛し、自然を愛し、環境を守り、地球を守る壮大な目標をもって活動している。

針葉樹きみまち杉
（秋田県能代市）

巨樹・巨木の基準

しからば何をもって巨樹・巨木林と言うのか。大きな木のイメージとして、思い浮かぶのは、先ず幹の太い木、高さの高い木であり、次に根を張った立派な木、年を経て熟成した老木などである。巨樹・巨木林では、環境庁が63年度の調査で実際に使用したものを基準にした。林というが、木の集合体つまり「林ではなく、単木だけでなく」大木の多い森林も対象にした。特に意味はなく、単なる「語呂（ごろ）」で決めたものである。

また調査項目は、全国的に多数の巨樹を測定することなので、難しい樹種ごとの基準を変えることなど検討したが、測定可能な「幹（みき）周（まわり）」３m、（直径）１m以上を対象にした。計測位置測定は「目とおり」（胸高）1.2mでなく、国際基準で認められている地上1.3m、（4.5フィート）を採用した。ちなみに実測された幹周３m以上の樹木、（約５万本）の大半（90％）は幹周囲６m以下（直径２m以下）、樹高（推定値）データが多く70％が30m以下である。

樹高	割合	幹周囲	割合
30m以下	70％	6m以下（直径２以下）	90％

続く

ドラッカーの言葉-2

◇組織社会

現代社会は組織なしに機能しない。あらゆる企業、病院、学校、政府機関、ボランティア団体、宗教その他の社会的機関は組織なしに機能しない。しかも、多元的社会になった。生産、医療、年金、福祉、教育、科学に至るまで社会的な主な問題は、組織の手にゆだねられた。

◇マネジメント

組織をして高度の成果を上げさせるものがマネジメントであり、あらゆる部門で高度の知識を有するマネージャーの力である。

◇成果

マネージャーは高度の知識を基本とし、知識を体系的に活用し組織に成果を上げさせなければならない。

続く